古典童話からのメッセージ
—アンデルセン童話「ひこうかばん」の考察—

浜　野　兼　一
Hamano Kenichi

キーワード：創作童話、登場人物、アンデルセン

はじめに

本稿は、童話作品に込められた読者へのメッセージを明らかにするため、童話の古典として知られるアンデルセン童話を取り上げ、その作品の一つである「ひこうかばん」を中心に考察するものである。

小説「即興詩人」によって、アンデルセンの名が世に知られるようになるなかで、世にはじめてアンデルセンの童話が出た。このとき 1835 年、アンデルセンは 30 歳であった。作品が発表された当初は、童話作家としてのアンデルセンは評価されていなかったが、その後「人魚姫」という作品によって、童話作家としての存在もしだいに認知されることとなった。「人魚姫」は、童話集としては 3 冊目となるものにおさめられた作品の一つであったが、周知の通りこの作品はアンデルセンの代表作の一つにも数えられている。

なお、アンデルセンは、156 編の作品をおよそ 40 年にわたって書き上げた。そして、その作品の数々は現在に至っても世界中の人々に読みつがれている（日本では明治中期以降その名が知られるようになる[1]）。アンデルセンが書きあげた珠玉の童話は、童話の古典と呼ばれるようになった現在においても、児童文学の様々な分野に大きな影響を与え続けているといえよう。

ところで、童話というジャンルの読み物の中には、ストーリーの展開を左右するような人物や動物などが登場し、作品の展開を様々な方向に導く。しかし、どのように場面が進んだとしても、主人公の動きが作品全体の根幹をなしているといえる。本稿で取り上げる「ひこうかばん」も、主人公の少年の言動や振る舞い、性格などが作品の色を浮かび上がらせている。ストーリーの展開はわかりやすくシンプルなものであるが、その内容にはアンデルセン自身の出自

や経験が映し出されていると思われる部分もみられる。この点は、同作品を考察の対象として選んだ理由のひとつでもある[2]。

一方で、作品を一読すると、その中心にあるものは「一人の人間として生きてゆくために大切なこととはなにか」という問いかけであることがわかる。この問いに対する答えがどのようなメッセージとしてストーリーのなかに組み込まれているのか、その一端を明らかにしたい。

本稿の内容としては、まず、「ひこうかばん」という作品が、アンデルセン童話の中でどのような色彩を放っているのかについて、同作品の内容の概要を確認するとともに、特に登場人物の諸状況に着目し、アンデルセン童話の他の主要作品との比較・検討を行う。次に、「ひこうかばん」の主人公が男の子であるという点に着目し、この点をもとに考察対象の作品を絞り込んでストーリーの展開や主人公の動きなどに着目して検討する。さらに、前節の検討を踏まえて、「ひこうかばん」の主人公の行動を主体性という側面から分析することにより、ストーリーに映し出されているメッセージの一端を明らかにする。

1　代表作品の中の「ひこうかばん」

本節では、「ひこうかばん」の内容を踏まえた上で、作品の特徴を分析する。特に、登場人物の検討という視点から、アンデルセン童話の代表作品と「ひこうかばん」の内容を比較しながら考察していく。

「ひこうかばん」のあらすじ

裕福な家庭に生まれた息子がいた。この息子は大金持ちの親が死んだことで莫大な遺産を手にすることとなったが、働くこともなく、手にした大金で好き放題散財する日々をおくった。こうした生活を続けたことで結局持っていたお金はほとんどなくなってしまう。

お金がなくなると、どういうわけか友人もまわりからいなくなり、どうしたものかと考えているとき、１人だけ息子に声をかけてくれた親切な友人がいた。息子はその友人からカバンをもらった。しかし、カバンに入れるものをなにも持っていなかった息子は、しかたなく自分でそのなかに入ることにした。すると、不思議なことにカバンは空に舞い上がったのである。

息子はカバンに乗ってトルコまで飛んで行った。トルコでは、予言によりお城から出られない姫がいることを知り、息子はカバンに乗って姫の部屋まで行くことにした。姫の部屋にたどりついた息子は、姫と意気投合し、息子は姫の親（王）に紹介されることになった。そして、姫の親と会った日に息子が面白い話しをしたことで、王と后は息子を気に入り姫との結婚を許された。

結婚式の前日に、息子はカバンに乗ってトルコの街中の夜空に花火を鳴らしたが、この出来事を人々は驚きと喜びで受け入れ姫の婿になる息子を歓迎した。その夜息子は町に出るためにカバンを森に置いておくことにした。ところが、町から息子が森に戻ると、花火の火がついてしまったのかカバンが燃え尽きていたのである。

息子はもう空を飛ぶことができないためお城にも行けなくなってしまった。そんなこと

を知らない姫は、いつまでも息子がカバンに乗ってやって来るのを待ち続けているのであった。

上記の内容から、「ひこうかばん」のストーリーは、裕福な家庭で育った「息子」を主人公として構成されていることがわかる。この点を踏まえつつ、本節ではストーリーに登場する男の子（男性）に着目して考察を試みることにする。アンデルセン童話の主要作品に登場する男の子（男性）の比較を行うことで、「ひこうかばん」の作品としての特徴を検討するとともに、同作品がアンデルセン童話の作品の一つとしてどのような位置にあるのかをみていく。

アンデルセン童話には、童話の古典と呼ばれるようになった現代においても、様々な作品が読み継がれてきている。こうした作品のうち、ストーリーのなかに「男の子（男性）が登場する主要作品」という条件を付けると、作品の数が絞り込まれることになる。表１にその内容を示す。

表１　「ひこうかばん」と他の主要作品の比較／登場人物としの男の子（男性）

作品名	作品に登場する主な男の子（男性）	備考
ひこうかばん	裕福な家庭で育った息子	奔放な生活により日々の糧を失いかけても、自分の思うがままに生きている。
雪の女王	カイという男の子	純粋な心をもっていたカイが偶然の出来事で自分の記憶を奪われてしまう。
裸の王様	王様	自分のプライドを守るために自分の心を偽る為政者。
人魚姫	王子	王子は「人魚姫が王子を慕っている」こと、「人魚姫の助けにより命を落とさずに済んだ」ということ、を最後まで知ることがなかった。
白鳥の王子	11 人の王子	悪い心をもつ王妃に白鳥になる魔法をかけられた 11 人の王子だったが、王女エリサの努力で魔法が解かれる。
火打ち箱	兵士	魔女を殺して火打ち箱を手に入れた兵士が、贅沢な生活を手に入れたり、姫と結婚して王にまでのぼりつめたりする。
すずの兵隊	小さな男の子	小さな男の子の何気ない行動が主人公（すずの兵隊）の運命を決定づける。

上記の表をみると、それぞれの作品において男の子（男性）が重要な役柄に置かれているのがわかる。各作品の内容をたどっていくと、「ひこうかばん」以外で男の子（男性）が物語の主人公として描かれているのは、「裸の王様」「火打ち箱」の２作品である。なお、「すずの兵隊」の主人公は兵隊（＝男）であるが、人形という設定になっているので考察対象から外している。

以上を踏まえると、次の課題は「ひこうかばん」「裸の王様」「火打ち箱」の３作品の検討ということになるが、ここでは作品の状況設定が比較的近い「ひこうかばん」と「火打ち箱」の２作品に絞り内容の分析を試みる[3]。

２　「ひこうかばん」と「火打ち箱」の比較

本節では、「ひこうかばん」「火打ち箱」の２作品について、主人公の行動からそれぞれの人物像を検討し、「ひこうかばん」の「息子」の特徴を明らかにする。

１）「ひこうかばん」

「ひこうかばん」の「息子」は、経済的に恵まれていたこともあり、金銭面では庶民の感覚とはかけ離れた自由奔放な生活をおくっていた。ストーリーをたどっていくと、何かに対して「耐えたり」「我慢したり」という行動は全く出てこない。そして、「ひこうかばん」を手に入れたのも自分の努力からではなく他者から貰うということによる。結局、その奔放さが人生の最も大切な時機に負の結果を導いてしまうことになる。

２）「火打ち箱」

兵士が魔女と出会うことで、兵士自身の生活や人生が大きく変わっていくストーリーである。兵士が手に入れたものは、魔女の導きで手に入れた金貨と魔女を殺して手に入れた「火打ち箱」である。金貨を使い果たしたあと、火打ち箱から現れた獣に助けられ最後には王様から王位を譲られることになる。

表２　「ひこうかばん」「火打ち箱」の比較

書名／項目	「ひこうかばん」	「火打ち箱」
主人公	裕福な家庭の息子	兵士
キーとなるキャスト	カバンをくれた友人、カバン	魔女、火打ち箱、獣
利益	経済的に豊か、空を飛ぶカバン 姫との結婚の許可	金貨と火打ち箱、姫との出会い、 王位に就く
不利益	財を失う、カバンを焼失する、王室への道が閉ざされる	散財する、死刑が宣告される
決定的場面	むすこは、ひとまず森にかえって、かばんのなかでひと休みしようとおもいました。――ところがどうしたということでしょう。かばんは、まる焼けになっていました[4]。	やがて一人の兵士が梯子へ乗つて、罪人の首に縄をかけやうと致しますと、罪人は、どうか煙草を一服喫はして下さいと申します。王様もこの願ひをお許しにならない譯には参りません[5]。

上記の表に示した内容について、まずは主人公のところから２作品の特徴をおさえながらみていく。

最初に確認しておきたいのは、「ひこうかばん」の「息子」（以下「息子」と略）と「火打ち箱」の「兵士」（以下「兵士」と略）は、はじめの設定が息子（＝金持）、兵士（＝国を守る戦士）という点で異なる、というところである。

ストーリーのはじめの段階において、息子は商人（父親）が死去したことにより、お金が自由に使える身になるが、兵士のほうは、この時点で早くもその後の展開に大きな影響を与えるキャストとの出会いがある。それは魔女との出会いである。一方息子は、受け継いだ遺産を使い果たしてからキーとなるキャスト（カバンをくれた友人）との出会いを迎える。ただ、友人との接点はわずかで、結局「カバン」と息子の動きがストーリーの中核をなすようになる。

こうしてそれぞれの内容が進んでいくが、利益と不利益という点からみると、両作品に共通してみられるものがある。次にこの点について検討する。

まず、最もわかりやすのが「姫との出会い」であろう。また、自分の意のままに動く「道具」を手に入れるところも共通点と言える。さらには、益を得る状況や規模は違うものの、「大金を手に入れる」という部分も共通している。なお、不利益に目を向けると、散財するという点が共通している。つまり、「利益」については共通していると解釈できる点が複数あるが、「不利益」については少ないということになる。

次に、表に記した記述を踏まえながら、それぞれの作品の決定的場面について比較検討してみる。

まず、「ひこうかばん」については、息子が考えるほとんどすべての事柄をうまく運んでくれたカバンを焼失したことで、手に入れる寸前までいった大切なものを手に入れることができない状況となった。予想外の出来事が大団円ではない結末を表出したといえるのではないだろうか。

一方、「火打ち箱」の場合は、兵士が姫との密会を王室に知られて危機的状況に追い込まれ死刑を宣告されながらも、死刑執行直前で死を免れるのである。しかも、なにげない場面から死の回避に展開している。もし王が兵士の求めた「煙草を一服」を許さなかったら、そこで物語が終わっていたともいえよう[6]。

3　ストーリーに映し出されるメッセージ

本節では、前節までのところで明らかになった「ひこうかばん」の作品としての特徴に基づいて、さらに内容の分析を行い、ストーリーに映し出されるメッセージを浮かび上がらせる。今回は、特に主人公の主体性という側面から検討する。

ストーリーの内容をたどっていくと、息子の行動は主体的そのものであると言える。息子の行動を振り返ってみると、「お金を積極的に使う」「かばんに乗ってトルコまで行く」「姫に直接会いに行く」「空から花火を打ち上げる」といったものが挙げられる。こうした息子の行動からは、およそ消極的という言葉は出てこない。

しかし、こうした息子の行動をみるだけで主体性があるとするのは、一面的な理解であるとも言える。なぜであろうか。それは、前述の主体的行動は、その根本において自らなにかしらの努力や積み重ねをして獲得したものがもとになっていないからである。つまり、「与えられたもの」「偶然手にしたもの」をもとに、あるいはそれ自体を自分の思うがままに利用しているだけなのである。しかもその「利用」が適切なものなのか、という問題もある。

ストーリーの中において、王と妃のためにお話しを創り出す[7]という場面以外は、息子が努力をして自らの手でお金を稼いだり、苦しい状態から抜け出す状況に身を置く、といった場面はほとんど出てこない。これらの点から、息子は、自分が生を受けた環境と偶然の出来事から得た「お金（親が遺した財産）」と「カバン（友人にもらった）」を結局は駄目にしてしまうという部分の印象が強く残るのである。

では、アンデルセンは息子という主人公を通じて何を伝えたかったのであろうか。例えば、作品のはじめのところに次のような場面がでてくる。

> まあこんなふうにすれば、いくらあっても、お金はさっさとにげていってしまうでしょう。とうとうむすこはたった四シリングの身代になってしまいました。身につけているものといっては、うわぐつ一足と、古どてらのねまきのほかには、なにもありません。こうなると、友だちも、いっしょに往来をあるくことをきまりわるがってまるでよりつかなくなりました[8]。

金持ちから四シリングの身代へという、天と地ほどの場面の転換をストーリーのなかで生き生きと描けるのは、デンマークの下層階級から抜け出して上に向かって社会移動を果たしたアンデルセンならではともいえよう。

息子が、上記のような状況に立ち至ってしまったことをよく考え、自分自身の問題点に気がつけばよかったところであるが、アンデルセンは間髪を入れずすぐに「カバンをくれる友人」を登場させている。こうして、自分を見つめ直す間もなかった息子は、後半の場面でまた同じような過ち（逸脱的行為によって、手に入れた大切なものを失う）を犯してしまう。

以上の検討により、「ひこうかばん」のストーリーから浮かび上がるメッセージとは、「与えられたものをどのように活用すればよいのかを考えることの大切さ」「チャンスはいつもたらされるかわからない」「チャンスは何度もあるものではない」といったものであろう。そして、これらのメッセージは、本稿のはじめの部分でも述べた「一人の人間として生きてゆくために大切なこととはなにか」という問いかけへの答えにも繋がっていくものといえよう。

おわりに

以上本稿では、童話の古典として知られるアンデルセン童話を手がかりに、代表作品の一つである「ひこうかばん」の内容を中心に分析・検討し、作品にどのようなメッセージが込められているのかを考察してきた。

第１節では、「ひこうかばん」という作品の特徴を明らかにするために、登場人物の検討という側面から、アンデルセン童話の代表作品と「ひこうかばん」の内容を比較・検討した。この結果、ストーリーの中心に「息子」を置いて、その振る舞いや言動に作者の思いや心情を映し出そうとしているのではないか、という課題が提起された。

第２節においては、「ひこうかばん」の主人公である「息子」の特徴を明らかにするために、「ひこうかばん」「火打ち箱」の２作品について、それぞれの主人公の行動から人物像を検討した。これにより、「ひこうかばん」の「息子」の行動や性格の一端が明らかとなった。

第３節では、「ひこうかばん」の作品としての特徴に基づいて、ストーリーに映し出されているメッセージを検討するために、主人公（息子）の主体性という側面から考察した。この結果、「一人の人間として生きてゆくために大切なこととはなにか」という問いに対する答えのヒントが、浮かび上がったメッセージの中に込められているということが明らかとなった。

今後の研究課題としては、まず、本稿で取り上げたアンデルセン童話以外の古典童話について、本稿の各論点を検証する必要がある。また、本稿で考察することができなかった内容の分析（登場人物の心情、台詞等）についても検討しなければならない。なお、これらは、作品が翻訳された時代背景や童話作品の意味づけなども踏まえながら考察したい。

---

[1]石川春江「明治期のアンデルセンについて」（『参考書誌研究』(5) P77-91、1972年７月所収）では、例えば、巖谷小波が明治26年『幼年雑誌』に「飛行鞄」の翻案を載せていることに触れ、この時期におけるアンデルセンの認知度について「この時代は童話作家アンデルセンの名はしられていても、彼の童話の全貌、少なくとも代表作はしられていなかったと思われる」と述べている。

[2]作品の内容にアンデルセン自身の出自や経験が映し出されている点については、ほかのいくつかの作品にもみられる傾向であるが、「ひこうかばん」は主人公がアンデルセンと同性であること、身分や境遇、生活環境の変化、転換などがアンデルセンの人生そのものである、という点で本稿の考察対象とした。

[3]「ひこうかばん」と「火打ち箱」の主人公が息子、兵士（＝一般市民）であるのに対して「裸の王様」は支配層、為政者である。この点を踏まえると、「ひこうかばん」と「火打ち箱」の２作品の検討が妥当と考えた。

[4] 「ひこうかばん」（『新訳アンデルセン童話集第一巻』同和春秋社　1955年７月所収）。同書では、この記述のあとに「…むすこはとぶことができません。もうおよめさんのところへいくこともできません。」と展開し、ストーリーの方向を決定づけている。

[5] ヨウネン社編『アンデルゼン物語集』1924年　P15-19。獣を介して行っていた姫との密会が王室に知られたことから、兵士は囚われの身となる。

[6]『同前書』P17。つまり、兵士が煙草の火をつけるために「…兵士は火打箱を取つて、初めカチと打ち、その次にカチゝと打ち、それからカチゝカチと打ちました」という行動をとったことで、目の前に獣が現れて命を救ったのである。

[7]前掲書「ひこうかばん」。息子は姫とのやりとりの中で結婚の約束をすることになる。そこで、「…わたしは、お話のほかには、なんにも、ご婚礼のおくりものをもってこないことにしましょう。」と姫に伝えて約束の日に城に来るのである。

[8] 『同前書』。